第６　無限の可能性
【暗唱聖句】
「すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。」コリント人への第一の手紙/ 12 章 11 節

【日曜日・様々な賜物・奉仕における一致】
弟子たちは、それぞれ個性豊かで、性格もみな違っていました。それは教会にとって弱みではなく、強みでした。取税人だったマタイは几帳面で正確、ペテロはしばしば衝動的に行動しましたが指導者の素質があり、ヨハネは心優しい反面、ずけずけと物を言う性格、アンデレは社交的で気配りができ、トマスは疑問を持つ傾向がありました。

「からだが一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である。なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである」コリント人への第一の手紙 12 章 12、13 節

パウロは教会を人間の体にたとえて教えています。体には頭があり、目があり、手がって、足があり、それぞれ違うけれども、それぞれ無くてはならない重要な働きをしています。意識することのないような目に見えない小さな部分でさえ、それが無ければ体全体が機能しなくなることも少なくありません。教会もそれと同じだと言うわけです。しかし体は元々一つですが、教会に集まってくる人たちは、知らない人同士であり、元々はばらばらだったのです。それが一つになるというのは、頭ではわかっても簡単なことではありません。そこでそれを可能とするために、キリストにつらなるバプテスマを受け、同じ聖霊が与えられたのです。その結果、知らないはず同志の者たちであるにも関わらず、主にあって一つの思いとなることができるのです。

【月曜日・神―あらゆる良い賜物の与え主】
「それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ」マルコによる福音書 13 章 34 節
このたとえ話の中にあるように、神様は私たちそれぞれに主の働きを割り当てられていることがわかります。すべての人が神様の働きに召されており、それを行っていく責任があります。しかし、神様の働きをするためには、そのための能力が必要です。そこで、聖書は次のように語っているのです。
「これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」コリントの信徒への手紙一 12 章 11 節
それぞれに計画されている神様の働きを成し遂げていくために、聖霊は一人一人に必要な賜物を与えてくれます。与えられた賜物の種類や量は、それぞれ違います。それは比較すべきものではなく、それぞれ与えられた分を忠実になしていくことが求められています。霊的な働きですから、祈りなくしてはうまく進みませんし、賜物を用いていくことによって成長し、さらに多くの聖霊の賜物が与えられるようになります。

【火曜日・霊的な賜物の目的】
霊的な賜物が与えられる目的は、まず、「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです」（コリント一 12 章 7 節）とあるように、自分の栄光のためでなく、教会の全体の益となるためです。このことは、エフェソ 4 章 12 節でも、「聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆ」くとある通りです。音楽の才能やスポーツの才能、また管理者やリーダーとしての才能など、この世界には様々な才能が

与えられた人たちがいます。それが先天的であろうと後天的であろうと、その才能が神様のために用いられるときに初めて教会全体の益となり、キリストの体を造り上げていくことになります。そのために聖霊の賜物はより豊かに与えられるのです。しかし、聖霊の賜物は教会全体のためのみならず、それを通して結果的に自分のためにも与えられるものであります。エフェソ 4 章 13 節では、「ついにわたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです」とあります。ここでは、私たちが 1 つになるため、成熟した人間になるため、そしてキリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するために、聖霊の賜物が与えられ、それぞれの神様の働きが任せられるのだと教えられています。

【水曜日・あなたの賜物を見つける】
私たちは、「キリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています」（コリントー 1 章 5 節）。「その結果…賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます」（コリントー 1 章 7 節）。そして、「その保証としてわたしたちの心に“霊”を与えてくださ」（コリント二 1:22）っています。ただ、時々自分に与えられた賜物がわからないという声を耳にします。霊の賜物を発見するために、神様のためにどのようなことをしてみたいか考えてみると良いでしょう。多くの場合、自分の興味のあることと与えられた賜物が一致します。人から賜物を指摘されることもあります。また、教会から与えられた働きやおかされた環境を通して、賜物が開花することもあるでしょう。さらに、ヤコブ 1 章 5 節では、「あなたがたの中で知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます」とあるように、必要な賜物を神様に求めることもできます。

【木曜日・賜物を育てる】
マタイ 18 章にタラント（賜物）のたとえ話があります。主人は、「それぞれの力に応じて」タラントを分け与えていきます。タラントには差があるということですが、それはその人にとって一番良いものが与えられるのだということを意味しています。タラントを活かして、しっかりと与えられた人生を生きるならば、主人は成果に関係なく、「善い忠実な僕だ。わたしと一緒に喜ぼう」と言って下さいます。2 タラント与えられた人は主人が帰ってくるまでに 4 タラントに、5 タラント与えられた人は 10 タラントに増やしたわけですが、これはクリスチャンの成長を現わしています。これは火曜日で学んだエフェソ 4 章 13 節の「成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」という言葉と同じです。しかし、1 タラントを与えられた人は、土の中に埋めて使わなかったために、全く成長を見ることができませんでした。主人は、「怠け者の悪い僕だ」といって厳しく叱られたのでした。このたとえ話からわかるのは、神様は与えられた自分の賜物を用いて神様の働きをなすことで成長して欲しいと願っておられることです。クリスチャン人生とは、神様から与えられた霊的な賜物を用いて教会の益となる働きをすることで、神様の栄光を現わしていくものです。そして、それは結果的に自分自身の成長につながり、その成長を神様も望んでおられるのです。神様は、わたしたちがそのように成長していく人生を歩めるようにと、ひとりひとりに計画されているのです。